

## ブッデنبローク家の倫理と資本主義の精神病

——マックス・ヴェーバーの「プロテスタンティズム・テーゼ」に照らして見たトーマス・マン『ブッデنبローク家の人々』\*

山室 信高

マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」』(1904/05)<sup>(1)</sup> (以下『プロ倫』)は周知のようにカルヴァン派を中心とするプロテスタンティズムの天職義務の観念と世俗内的禁欲のエートスが合理的に営利を追求する近代資本主義の世界史的進展に寄与したことを論証した社会科学の古典的論文である。一方、トーマス・マンの『ブッデنبローク家の人々 ある家族の没落』(1901) (以下『ブッデنبローク』)は北ドイツの港町リューベックを舞台に、名門商家の四代にわたる変転をリアリスティックに描いたベストセラーの長篇小説である。ほぼ同時期に成立し受容されたとはいえ、一方は普遍史的展望を持った学問的な歴史叙述、他方は一地方都市の、しかも作家自身の家族をモデルにした芸術作品である。ジャンルもスタイルも異なり、互いに没交渉に見える二作であるが、しかしそのテーマ、すなわち宗教的バックボーンを持つ近代市民階級の興亡というテーマにおいては、少なからず触れ合うところがある。このことはトーマス・マン自身、第一次世界大戦中に書いたエッセイ『非政治的人間の考察』(1918)中の「市民性」の章で指摘しており、次のように述べている。

私は近代的=資本主義的実業人、職業義務の禁欲理念を持った市民が<sup>ブルジョア</sup>プロテスタンティズムの倫理、ピューリタニズムおよびカルヴィニズムの産物であるという考えをまったく独自に、何も読まずに、直観をもって感得し、発案した、そして後に、最近になってようやく、この考えが同時期に学殖豊かな思想家たちによって考えられ、表明されていたことに気づいたのであるが、この確証に私はいくばくかの価値を置くものである。ハイデルベルクのマックス・ヴェーバー、その後エルンスト・トレルチが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」について論じた […]。(GW XII, 145)<sup>(2)</sup>

もっとも近年の研究によれば、マンはヴェーバーやトレルチを直接読んだのではなく、たまたまセカンドハンドでこのことを知ったにすぎないようだが<sup>(3)</sup>、少なくとも『ブッデنبローク』が『プロ倫』よりも早く世に出ていることから、マンがヴェーバーを参照したことはありえず、まさにその点でマンは自らの先見の明を誇っているわけである。

このマンの言に触発される形で、これまで幾人かの論者が主にマンの初期作品の主人公たちにヴェーバー的な意味でのプロテスタント的禁欲主義の職業人——マン言うところの「業績の倫理家 (Leistungsethiker)」(ebd.) ——のタイプを見出しつつ、ヴェーバーとマンの照応関係を考察してきた<sup>(4)</sup>。ただこうした研究の常として、ヴェーバーとマンの間のアナロジーを列挙して事足りりとする嫌いがなきにしもあらずなのだが、本論ではあえて対象を『プロ倫』と『ブッデ

ブローク』とに絞り、できるだけシステマティックに『プロ倫』の論旨に即しながら、『ブッデンプローク』がどの程度までヴェーバーの仮説に適合しているか、あらためて検証を試みたい。そしてそこで明らかになった適合関係がいかんして生じたのかという理由についても併せて考えてみたい。というのもこの点については従来、マンの見解に倣う形で「作品自身の意志」(GW XI, 381)によるとか、あるいは「親和力」や「時代精神」によるといった漠然とした説明で片づけられることが多かったからである。同時代的な経験があったことは間違いのないところだが、本論ではいまだ少し具体的な理由を探ってみることにする。

## プロテスタンティズムの倫理 (一) ルター派=敬虔派

はじめに二つの偏差条件を確認しておかなければならない。一つは『ブッデンプローク』が1835年から1877年までの19世紀中葉に時代設定されているのに対して、『プロ倫』の方は宗教改革からその後一世紀余りにわたるプロテスタンティズムの伝播拡大の時期、すなわち16世紀から17世紀にかけての時代を扱っていることによる、およそ200年の時代の隔たりである。この間にキリスト教は見紛いようもなく世俗化の過程を進んでいる。もう一つは地域および宗派の違いである。『ブッデンプローク』は北ドイツの都市リューベックが舞台だが、そこはプロテスタントの中でもルター派の勢力が強い土地柄である。他方『プロ倫』の論述はプロテスタンティズムのうち主としてカルヴァン派ないしピューリタニズムを対象としており、イギリス・オランダの大部分、フランスの一部、そして北アメリカのニューイングランド植民地に及んでいる<sup>(5)</sup>。時代差と地域(宗派)差——この二つの条件を念頭に『ブッデンプローク』における「プロテスタンティズムの倫理」のありようを検討してみよう。

まず問題になるのが小説冒頭、ブッデンプローク家の娘アントーニエ(通称トーニ)が当主である祖父ヨハン・ブッデンプロークに請われて暗唱する「教理問答(カテキズム)」の場面である。そこには「1835年に貴き賢き参事会の認可のもと改訂出版されたばかりの教理問答書」(9)とあるが、出典調査によるとそれはリューベックで1837年に出された『ルターの小教理問答解説』を下敷にしている<sup>(6)</sup>。このタイトルからルター派がリューベックの公認宗教であり、そして8歳のトーニがそれを学んでいることからルター派の浸透ぶりが窺えようが、ただしトーニはほとんど意味も分からず唱えているだけで——彼女は唱えながら市門の外の「エルサレムの丘」(9)での兄弟との櫓遊びのことを連想している——信仰の内容よりも形だけが優先されている点に宗教の世俗化の様子がはっきりと表れている。

この場面をヴェーバーの所論との関係で考えると「教理問答書」というテキストの性格が目される。『プロ倫』は宗教的達人たちの教義や思想そのものよりも、それらが一般信徒たちにどのような影響を及ぼしたか、どのように受容されたかに研究の焦点を合わせている<sup>(7)</sup>。したがって一般信徒が接する機会の多い、牧師の説教集や通俗的な信仰冊子の類を参照テキストに多く用いている。『ブッデンプローク』に出てくる「小教理問答書」も堅信礼前のキリスト教徒の子弟に信仰の基礎教育を施すという意味で一般信徒になじみ深い、『プロ倫』の問題関心に即したテキストであると言える。もっともヴェーバーは、二、三の言及はあるものの(vgl. PE, 83, Anm.135, 136)、「教理問答書」を主要テキストには用いていない。これにはルター派が彼の視野から多少とも外れており、カルヴァンの「教理問答書」がルターのそれほどには信者の間に普及

しなかったという宗派の相違によるところが大きいだろうが、それはともかく『ブッデンブローク』と『プロ倫』はキリスト教信仰を一般信者の日常生活のレベルで見えており、目線の高さないし低さを同じくしていることは注目しておきたい。また「教理問答書」の中味に関しては『プロ倫』との関わりで無視できない小さな出来事が起こる。トーニは母親に助け舟を出してもらいながら暗唱する。「私は信じます、神様は私を […] 生きとし生けるものすべてとともにお創りになりました。 […] そして服と靴とを […] 食べ物と飲み物とを、家と庭とを、妻と子とを、田畑と家畜とを…」(9)。この「田畑と家畜」という文句を聞いて、祖父ヨハンはたまらず笑い出し、「教理問答を茶化すことができるのがうれしくて」、商人らしく「トーニの田畑と家畜について聞き、小麦一袋をいくらなら売ってもよいかと尋ね、彼女と商売をしようを持ちかけた」(10)。ここでは宗教上の、神による天地創造の神話が、一挙に経済的な、日常の商取引の話題に転じている。非常に素朴で世俗化した形ではあれ、ここにヴェーバーが追究した「プロテスタンティズムの倫理」と「資本主義の精神」の独特な結びつきが一瞬垣間見えよう。

この独特な結びつきについては後述するとして、次に検討すべきは、そこでヨハン老人を「お父さん、神聖この上ないものをまた笑い種にするのですか」(12)と窘める息子のコンズル、ジャン・ブッデンブロークを中心とするこの家族の信仰状況である。世俗化したルター派を基調としながらも、そこには若干他の色合いも交じっているようである。ジャンの母親、すなわちヨハンの妻であるアントアネットは旧姓ドゥシャンという「ハンブルクの裕福な名望家」(57)の娘であるが、もともとは「祖父の側がフランス系スイスの一族の出」(10)とされている。つまり彼女はユグノー（フランスのカルヴァン派）の家系を引き、ブルボン王朝の弾圧によりフランスから北ドイツへ移ってきた大量の亡命ユグノーの子孫ということになる<sup>(8)</sup>。この母の血を引くジャンは父親に比べて信仰心の篤い人物として描かれている。それがもっともよく出ている場面の一つは、「分厚い革製のファイル」に挟まれた、家族の系譜と代々の出来事が記されている「プレスした表紙と金縁つきの帳面」(52)に末娘クララの誕生について記入するところである。この年代記風の家族の記録はもともとマン家に伝わるルター訳聖書（1682年、ヴィッテンベルク）に添付された文書が出典になっている。この家伝聖書はトーマス・マンから数えて四代前のヨアヒム・ジークムント・マン（1728-1799）という人物が所持していたもので<sup>(9)</sup>、そこに家族の記録をつけ始めたのも彼だった。それを読むと朴訥として荘重な文章のうちに神への恭順と感謝の念が溢れているが、こうした信仰感情は文体模写を通じてジャン・ブッデンブロークに移しこまれている<sup>(10)</sup>。「ああ、あなたのような神はどこにおられよう、万軍の主よ（Herr Zebaoth）、あなたはあらゆる苦難と危険においてわれらを助け、われらにあなたの意志を正しく知ることを教え給う、われらがあなたを畏れ、あなたの意志と命令に従順であることを見出さんがために！ああ主よ、われらが地上に生きてある限り、われらすべてを導き給え…」(53)。こうした情感豊かな信仰の表現は、ここでモデルになっているヨアヒム・S・マンの生きた時代背景を鑑みると、当時ルター派信者の中で広がりを見せていた「敬虔主義（Pietismus）」の流れを汲むものと思われる<sup>(11)</sup>。敬虔主義は一般に啓蒙主義への反動から生まれ、信仰の内面化と感情性を重んじたとされるが、ヨハンとジャンの父子関係もまさにそうである。19世紀初頭のフランス支配のもと啓蒙主義の洗礼を受け、ナポレオンを「天才（Natur）」(29)と持ち上げる「啓蒙された者」(14)としての父ヨハンに対し、同じナポレオンの「非人間（Unmensch）」性を「キリスト者として、宗教的情感をもつ者として」(29)非難する息子ジャンが対置されている<sup>(12)</sup>。

敬虔主義に関して、ヴェーバーはプロテスタンティズムの一派、しかも禁欲主義的な特徴を備えた一派として、しかしまた彼の主要な関心であるカルヴィニズムとは区別して論じている (vgl. PE, 53)。敬虔派は、イギリスのメソジスト派と並んで、プロテスタント諸教会内部からの「信仰復興 (リヴァイヴァル)」の動きで、特にフィリップ・J・シュペーナー (1635-1705)、アウグスト・H・フランケ (1663-1727) らに代表されるドイツ敬虔派は世俗化したルター派教会内の穏健な改革運動として多大な影響を持った。ドイツ敬虔派の最大の意義は、ヴェーバーによると「方法的に整備・制御された、すなわち禁欲的な生活態度がカルヴァン派でない宗教意識の領域 [すなわちルター派] にも入りこんだこと」(PE, 95) であった。ジャン・ブッデンブロークの口癖に「祈り、働き」(15)、あるいは「働き、祈り、儉約せよ」(174) とあるが、これはもちろん中世のベネディクト修道会の標語である“Ora et labora”をもじったもので、修道院生活における「禁欲的生活態度」の奨励、ヴェーバーの用語では「世俗外的禁欲」を意味する。修道院での「世俗外的禁欲」が世俗の職業生活の只中へ移された、すなわち「世俗内的禁欲」が成立するにいたったということが『プロ倫』の重要な論拠の一つであり (vgl. PE, 120f.)、これら二種の禁欲の共通点としてヴェーバーが見ているのは——「禁欲」という言葉から通常連想されるような苦行や黙想といったことではなく——何よりも方法的に組織だった合理的な生活態度なのである。そうした合理的な生活態度の一つの例としてヴェーバーは改革派や敬虔派信徒の間で行われていた「罪と誘惑、そして恩恵においてなされた進歩を箇条書きに、あるいは表にして記入する信仰日記 (das religiöse Tagebuch)」(PE, 84; vgl. 96, Anm.159) の類を挙げている。先のブッデンブローク家の文書はジャンにとって自らの信仰のありようを審査するその種の記録の役割も兼ねている。「もし私が自分の恋情を進んで発見しようとするなら、多くのことを挙げることができようが、ただし…」(56) などといった赤裸々な告白の言葉がそこには書かれている由である。またジャンは几帳面にも子どもの保険証書の額面など、金銭上のデータもそこに書き入れている (vgl. 53)。彼の言う「働き、祈り、儉約せよ」の「儉約」とは単に出費を抑えて吝嗇に徹するというのではなく、将来を見据えて計画的に金銭を管理するということである。彼は頗る数字に強く、一家の財産状況について事細かに暗算してみせ、妻の実家の浪費や奢侈には常々批判的である (vgl. 50, 79ff.)。ジャンのとする敬虔派的心情にあふれた禁欲的=合理的な生活態度には「こうした生活の聖化はほとんど事業経営 (Geschäftsbetrieb) の性格を帯びようになる」(PE, 84; vgl. 95, Anm.154) とするヴェーバーの言葉がよく当てはまる。通説ではジャンにおいては宗教的心情と利害関心が分裂しており、さらに言えばキリスト教徒としての敬虔さは世知に長けた算盤勘定をカムフラージュする偽善にすぎないとまでされるのだが、禁欲主義的エートスと資本主義的経営の密接な連関を想定するヴェーバー的な見方からすれば、それなりに首尾一貫した生活態度と見なすことができよう<sup>(13)</sup>。それでは徐々に『ブッデンブローク』における「プロテスタンティズムの倫理」と「資本主義の精神」の連関に目を移すことにしよう。

## プロテスタンティズムの倫理 (二) カルヴィニズム=ピューリタニズム

『プロ倫』においてこの二つをつなぐちょうど「蝶つがい」のような役割を果たすのが、あの周知の“Beruf”<sup>ベルーフ</sup>の理念である。もともと神からの「召命」を意味していたこの語を世俗的な「職業」の意味にも用いるようになったのは、ルターによる聖書翻訳がきっかけだった。この語義上

の革命的な転換とともに思想上も新しい考えがもたらされた。すなわち「世俗的職業の内での義務の全うをおよそ倫理上の自発的行為が成しうる最高の内容として評価すること、これこそが必然の結果として世俗的日常労働の宗教的意味にまつわる観念をもたらし、Berufの概念を生み出したのである」(PE, 39)。Berufに関するこの宗教改革以来の二重の語義と新たな倫理思想を『ブッデンプローク』の世界に見出すことは、これまでも度々やられてきたように<sup>(14)</sup>そう難しくない。

16歳で家業の穀物商会に入社した三代目のトーマス・ブッデンプロークは「自分の Beruf を実直 (Ernst) に熱意 (Eifer) をもって受けとめ」、「仕事に献身 (Hingebung) して取り組み、そして歯を食いしばって働きながら神のご加護を祈る数々の言葉を日記に書き入れる父親[ジャン]の静かで粘り強い勤勉さ (Fleiß) を見倣った」(77)。Ernst、Eifer、Hingebung、Fleiß —— Beruf に伴うこうした形容にプロテスタンティズムの職業倫理の倍音を聞くことができる。またトーマスの弟クリスチアンが商人を詐欺師呼ばわりしたとき、ブッデンプローク家のライバルであるハーゲンシュトレーム家のヘルマンがすかさず機を捉えて「私としましては自分の Beruf を大いに高く買っております」(318) とあてつけたのだが、それがクリスチアンを黙らせ、トーマスを怒らせる狙いどおりの効果を発揮したのも、世俗化したとはいえ Beruf になお宗教的な響きが付着しているからに他ならない<sup>(15)</sup>。

ところで、父親の勤勉な仕事ぶりを見倣って職業生活を営むトーマスはしかし、父親の信心まで素直に受け継いだわけではなかった。父亡き後、自宅に日曜学校や「エルサレムの夕べ」と呼ばれる読書会<sup>(16)</sup>を開く (vgl. 279) など、とみに信心深くなった母親のベティが「おまえがフランスやイタリアで法王の教会に少しばかり心惹かれたことは知っているけれど、そんなものはトム、おまえの信仰 (Religiosität) なんかではなく、何か別物よ、[...] 神様がおまえ [...] に年とともにそういうことに必要な真面目さをお与えになることをお祈りしなければね」(308) と見抜いていたように、トーマスは時にカトリックにもシンパシーを持つなど信仰の基礎が揺らいでおり、両親や妹のルター派=敬虔派の地盤からは離れている。特に敬虔派における信仰感情の直接の流露——これはヴェーバーも指摘する『『敬虔派』の決定的な特徴』(PE, 93; vgl. 102) ——例えば妹のトーニが人目も気にせず跪いて祈るのに対して、トーマスは「至極いたたまれない」思いをして、「慎み深い真面目さ、落ち着き払った沈黙、控えめな頷き」(260) で応える。このような物腰に窺われるトーマスの Religiosität とはいかなるものだろうか。

今述べた、敬虔派の感情過多に対して心理的な「はにかみ (Hemmungen)」(PE, 93) が働く点、あるいは父親が多分に持っていた神への「へりくだり (Demut) とくだかれた態度 (Gebrochenheit)」(PE, 103) に比して自己を恃む気概が強い点など、トーマスはどこかカルヴァン派に接近している感がある。その外面的要因としては、先のユグノーの祖母の血の他に、彼は若い時分、数年にわたって商人の見習修業をカルヴィニズムの伝統のあるオランダのアムステルダムで積んだこと、またその地の大商人の娘であるゲルダ・アーノルドセンと結婚したこと (もっともアーノルドセン家はもとはドレスデンの出 (vgl. 296))、あるいはかつてユグノーが強かった南仏のポーに療養滞在したことがあること (ただしそこではむしろカトリックに感化されたよう (vgl. 308)) などが挙げられるかもしれない。しかしここではやはりトーマスの内面に注目する必要がある。

『プロ倫』ではカルヴィニズムの教義上の要諦として「恩恵による選びの教説」(PE, 57)、い

わゆる「予定説 (Prädestinationslehre)」が取り上げられる。恩恵が与えられるか否か、救済されるか否かは神によってあらかじめ決定されており、そこには何ら人間の意志や行為が関与することはないという説である。ヴェーバーはここでも予定説そのものではなく、この「悲愴な非人間性」(PE, 62) を湛えた説が信徒に与えた深刻な心理的影響を問題にしている。そうした影響として彼は「個々人の内面的な孤独化」(ebd.) や「あらゆる感覚文化への原理的な嫌悪」(ebd.)、あるいは「人間の援助や友情を頼みにすることを警戒」し、「誰も信用せず、評判を落とすようなことを誰にも知らせない」という「神への信頼の排他性」(PE, 63) たる徹底的な隣人不信を指摘している。家長兼社主として常々孤独感につきまとい、妻や息子が入れこむ音楽を理解できずに敵視し、商人の世界の非情さを心得ては自己と家族と商会の体面を損なわないよう腐心する(特に後年の) トーマス——「彼はやはり真の情熱的なプロテスタントの真剣で深い、自虐的なまでに厳しく妥協のない責任感に満ち溢れていた」(653) ——にはここに言われているカルヴィニスト=ピューリタンの特徴が認められる。ただしそこで注意すべきは『ブッデンブローク』においては世俗化の進行とルター派=敬虔派の地盤のために予定説それ自体は後景に退いてしまっており<sup>(17)</sup>、それが及ぼした心理的影響の跡だけがトーマスには見られるということである。このことはヴェーバーが予定説のもっとも大きな心理的帰結として挙げた「救いの確証 (Bewährung, certitudo salutis)」というモチーフについても言える。予定説に従えば、「救い」自体は神の専権事項であり、人間の意志や行為によってはどうにもならない事柄であるので、そのせめてもの心理的な補償として「救われることの証」をカルヴィニストやピューリタンたちは必死に欲した。そこで彼らは使徒に倣って「自らの召命 (Berufung) を『確固たるもの』とする」べく、「日々の闘いにおいて自分が選ばれ義とされることの主観的な確信を獲得する」ための「もっともすぐれた方法として絶え間ない職業労働 (Berufsarbeit)」(PE, 70f.) に仕えたのである。トーマス・ブッデンブロークの場合は、「救い」自体はさしあたり——「永遠と不死の問題」(652) が切実になる晩年の擬似救済としてのショーペンハウアー体験は別に——関心外であり、「救いの確証」のモチーフだけが残ったまま、「商会の栄光を守り増すという一心で、成果をものにするための日々の闘いにおいて己という人間 (Person) を注ぎこむ」(268) ようにして——昔日のカルヴィニストたちがこの世で「神の栄光を増すために」(PE, 66) そうしたごとく——ひたすら自己の Beruf に励む。彼はそこでプロイセン軍の御用商人であった祖父ヨハンのことを思い浮かべているのだが、トーマスにはむしろヴェーバーの言う「資本主義の英雄時代の鋼鉄のピューリタン商人 (stahlharte puritanische Kaufleute)」(PE, 71) の面影がある——彼自身はいわば「信仰なきカルヴィニスト」、「神なきピューリタン」ではあるが。

カルヴィニズムの予定説から帰結する「救いの確証」のモチーフを通じて大きな「心理的モチベーション (psychologische Antriebe)」(PE, 55) が生じ、それがルターの聖書翻訳によって先鞭をつけられた Beruf の理念に結びついて、「世俗内的禁欲」という方法的・組織的・合理的に自己の職業を営む生活態度を育むにいたった。これがヴェーバーの「プロテスタンティズム・テーゼ」のシナリオであった。『ブッデンブローク』では、一定の偏差を含みながらも、ここまでこのテーゼの跡をたどることができた。次に、そこから「資本主義の精神」がいかなる姿を現してくるかを見ていくことにしよう。

## 資本主義の「精神」

ここでもまず偏差条件がある。階層ないし職種の違いである。『ブッデンプローク』は商人層、しかも中世来の長い伝統を引くハンザ同盟都市の上流門閥市民 (Patrizier) に属する、家父長制の豪商の階層を描いている。これに対して、『プロ倫』は商人層も視野に入っているものの、中小の手工業者、工場経営者ならびに労働者、独立自営農民といった「興隆しつつある中産市民層 (Mittelstand)」(PE, 24) をもっぱら扱っている。これは射程の大きい違いであり、資本主義の歴史における決定的な分岐となる商業資本と産業資本の対立、あるいはヴェーバーも問題にしている冒険商人や高利貸しによる前近代的資本主義と産業資本家および労働者による近代資本主義の対立にもつながる。この階層差を押ししていくと『ブッデンプローク』と『プロ倫』は大きくずれ違ってしまいそうである。しかしこれにはすぐにも留保をつけなくてはならない。すなわち『プロ倫』が問題にしているのは資本主義の経済制度ではなく、原題通り括弧つきの資本主義の「精神」であり、また『ブッデンプローク』もリューベックの経済史に主たる関心があるわけではなく、何よりも商人家族の心性史を語っているということである<sup>(18)</sup>。この点において二作品は再び接近しあうことになる。

資本主義の「精神」はさまざまな歴史的紆余曲折を経ながら発生してきたが、その際に最大の障害となったものは「伝統主義 (の精神) (Traditionalismus)」(PE, 19) とされるものだった。ここに言う「伝統主義」とは労働および経営を従来のパターン通りに行うことで、必要最低限の生産と利潤を維持確保しようとする精神性のことである。伝統主義と資本主義の精神上的確執をヴェーバーは彼に身近な繊維工場の例<sup>(19)</sup>に拠りながら描いているが、『ブッデンプローク』においてもその具体的例証を見出すことができる。すなわちジャンとトーマスの親子間においてである。

ジャン・ブッデンプロークは何よりも祖先の暖簾を重んじて、なるべく資産が減らないように、手堅い商売を心がけている。彼は一度商用でスコットランド (カルヴィニズムの強い地域!) に出かけたことがあったが、そこでの新規の取引先の開拓は「危険な性質」(175) をもつものとして断念してしまう。彼はその正当化に祖先伝来の訓戒、「息子よ、昼は楽しみもて仕事に励め、ただし夜は安らかに眠れる仕事にのみ励め」(176)<sup>(20)</sup> という言葉を引く。こうした態度を基本的に仕事に臨んでいるジャンはどうしても現状維持を優先し、商売を拡張し利益を増大させることには消極的にならざるをえない。先代の死後、ジャンの目標はまずもって「主の恵み深い助けを借りて、商会の財産を以前の水準にまで回復する」(81) ことであった。ジャンのこうした経営方針は伝統主義的精神に則るものと言ってよい。これに対してトーマスの方は、もちろん伝統をないがしろにするわけではないが、父親の死後、父とは一風異なる仕事ぶりを見せる。「トーマス・ブッデンプロークが手綱を握って以来、より独創的な、より新鮮で進取の気象に富んだ精神 (ein genialerer, ein frischerer und unternehmerischer Geist) が経営を支配するようになったことがまもなく目についた」(267)。トーマスはこの企業精神をもって、自ら商談に赴き、新しいブランチの開拓や販路の拡大を積極的に進める。また倉庫で働く人足とも直接交流して、商会の組織的まとまりを高める。彼は言う。「商人は役人であってはならない! [...] 商人には個性 (Persönlichkeit) が必要で、それが僕の好みなんだ。大きな成果は事務机からは獲られないと思う…少なくともそれは僕にはあまり面白くないだろう。成果は机上だけで計算されやしないよ…。

僕はいつだってものごとの進行をその場に身を置いて、目と口と手足で引っばっていききたいという欲求を感じている…僕の意志、僕の才能、何なら僕の運と言ってもいいが、そういうものを直接ぶつけることで思い通りにしたいという欲求をね」(269)。ヴェーバーも19世紀後半の繊維工業部門での「新しい精神、すなわち『資本主義の精神』」の流入について、まるでトーマスのような青年企業家の経営改革の例を示し、「そのような『新しいスタイル』の企業家」に必要なのは「明察と実行力の他に何よりもやはり極めて確固とした顕著な『倫理的』資質」、すなわち「過去の伝統主義に適合的なものとは異なった、特異な種類の倫理的資質」であって、それこそが「そうした改革にあってもどうしても不可欠な顧客と労働者の信頼を勝ちえ、無数の抵抗を克服する緊張感を保ち、そしてとりわけ […] 安穩とした生活の享樂とは相容れない、以前とは比べものにならないほど強度な労働成果を可能にした」(PE, 27)と述べている。こういう伝統主義とは切れた強固な「倫理的資質」——これが「倫理」と呼ばれているのはカルヴィニズムをはじめとするプロテスタンティズムの職業倫理を源泉とするからだ——「個人的なモラルの資質」(PE, 28)を備えたトーマス・ブッデンプロークはモダンな資本主義的精神を体現する主人公なのである。

ところでトーマス・マンはどのようにトーマス・ブッデンプロークのようなモダンな資本主義的精神を湛えた職業人を創造できたのだろうか。これは最初に引いた『非政治的人間の考察』のマンの発言でも問題になっており、マン研究においては「伝統的=ドイツ的市民(Bürger)か近代的=西欧的市民(Bourgeois)か」という形で長らく論じられてきたことでもある<sup>(21)</sup>。「トーマス・ブッデンプロークはドイツの市民ビュルガーであるばかりでなく、近代的市民ブルジョアでもある」(GW XII, 145)と正當にも指摘されているのだが、彼の「近代性」はいったいどこから来たのか。というのもリュベックでの見聞やトーマスのモデルとなった父T・J・ハインリヒ・マン(1840-1891)の影響を考えてみても、多分に伝統主義的な雰囲気の中にあって、資本主義的精神を形象化する契機には乏しいように見えるからだ<sup>(22)</sup>。マン自身の説明のようにそれを「詩的共感の体験」(vgl. GW XII, 144f.)に求めることをしないとすれば、一つ考えられる具体的な出典としてはリュベックではなくミュンヘンにある。トーマス・マンは1894年にミュンヘン工科大学の聴講生になる。そこで彼がもっとも興味深く聴いた講義は「国民経済学(Nationalökonomie)」であった。当時の友人への手紙には「なかでもまずもっとも面白いのは——信じられようか——有名なハウスホーファー教授が講じている国民経済学だ。教授は国民経済学をモダンかつモラル的な学と解していて、彼の講義はしばしば非常に哲学的な深みのある契機をもつ」(GKFA 21, 38f.)とある。このマックス・ハウスホーファー(1840-1907)はヴェーバーよりも一世代上、国民経済学史上では歴史学派のグスタフ・シュモラーと同世代に属し、「モダンかつモラル的」という形容はその学風を窺わせる。彼は経済学や国家学の分野で多くの教科書的な著作を書くとともに、一般向けの娯楽本も出すなど一種の名物教授だったらしい<sup>(23)</sup>。その講義録をマンはつけており、そこにはモダンな企業家に特有な資質が列挙されている。「企業家およびビジネスマンの個人的な要件：全体を見通し、相互に関連づける才能、潜在的価値を発見し、価値を評価・計算する才能。仕事上の実験とリスクを負うことも企業経営に必須の要件。また迅速な決断、こちらはまさしく今日ビジネスライフの激しい性質にあって求められる。さらに持続力、組織化、体系編成の才能」<sup>(24)</sup>。これをトーマス・ブッデンプロークの造形の直接の典拠とするのはやや無理があるが(国民経済学関連の知識はむしろ後の小説『大公殿下』(1909)に生かされることになる)、それでもヴェーバー

が親炙していた学問分野の言説にマンも『ブッデンプローク』執筆前に触れていたことは注目に値しよう<sup>(25)</sup>。

さて、新たな資本主義の精神の流入によってどういうことが起こるのかというと、それまでの牧歌的な生活に代わって激しい競争生活が始まる。ヴェーバーは端的に「向上しない者は没落せざるをえなかった」(PE, 27)と言っている。トーマス・ブッデンプロークも商人の生活の厳しさを肌身で感じながら、さらに一層自らの Beruf に打ちこみ、商売上の成功、参事会員への就任、新居の竣工へと登りつめていく。「彼は前へ前へと駆り立てられ、一時も平安を与えられなかった。一見休んでいるような時[...]でも、[...]彼の頭の中には無数の計画がひしめきあっていた」(419)。しかしその一方で彼の内面は密かに崩れ始めていた。次から次へと追われるように仕事をするとムはいつしかワーカホリックと言ってよい状態に陥る。「彼の活動欲、休むことのできない頭脳、行動力、それらは常に彼の父祖たちの自然で持続的な労働への喜びとは根本的に異なるもの、すなわち人工的なもの、神経の衝動、彼がいつも吸っている小さなきついロシア煙草と同じく実のところ麻酔薬であった」(612)。労働がそれなくしてはやっていけない「麻酔薬」と化すことはカルヴィニズムの職業倫理に孕まれていた傾向の極端な発現であると考えられる。そこでは労働は「禁欲の手段」(PE, 126)であるばかりでなく、「それ以上に何よりも神によってあらかじめ定められた人生全体の自己目的」(PE, 128)であった。フランクリンに典型的に見られるような近代資本主義の精神の独自のエトスを構成する「職業義務 (Berufspflicht)」(PE, 16)の思想にはこの「自己目的としての労働」という観念が浸みこんでいる。「労働の自己目的化」は世俗化の進展のなかで予定説が後退し、「救い」という本来の究極目的がアプリアリでなくなるにつれてますます顕著になっていく。今日の『資本主義精神』に充たされた性向の人々についてヴェーバーは「教会に敵対的ではないにしても無関心であるのが常である」とその世俗化の様子を指摘した上で、「彼ら自身に絶え間なく急き立てられて働くことの意味を問うなら [...] 自分にとって不断の労働を営むことは『人生に不可欠』になってしまったと端的に答えるだろう。これこそ実際唯一適切なモチベーションであり、それはまた同時に人間が生きてあるのは仕事のためであって、その逆ではないという生活態度の非合理的なものを表現している」(PE, 28)と述べている。これはまさしくトーマス・ブッデンプロークのことを言っているのではないだろうか。彼にあっても生きるために働くのではなく、働くために生きるという不自然な逆転、いやもっと言えば、ただ働くために働くだけで生きていないも同然という非合理的な倒錯が起きている。このことは彼にとって労働が「演技」と化していること、商人としての職業生活が「まさに役者の生活であって、非常に些細な毎日の細々したことに至るまでその全生活が一つの作り事 (Produktion) となってしまった」(614)という事態に表れている。

トーマスは以前から周囲が揶揄を込めて言うところの「見栄 (Eitelkeit)」、すなわち外見や身嗜みに気を遣う方だったが、これは本来の仕事に新鮮な気分で取り組むためであった。しかしここに来て、この「見栄」はそれ自体独立した厄介な仕事になり、「執着 (Manie)」や「拘泥 (Pedanterie)」(612)といったものに昂進する。また父から教えられた「儉約」もバランスを欠いたものになり、夏のバカンスを取りやめ、デザートも日曜だけにするかと思えば (vgl. 467)、自分の服や下着を買い揃えることには出費を惜しまない (vgl. 613f.)。そして商会に大きな損失を与えることになるペッペンラーデの穀物の「青田買い」は、確かに父祖の伝統主義的な経営では考えられもしないが、とって近代資本主義的に合理的な取引とも言えず、彼はそれが「不潔

な投機]、「暴利の貪り」(455)であると自覚しながらも非合理的な決断を下してしまう。ここにおいてヴェーバー的な意味での「禁欲」=合理的・経営的生活態度は破綻をきたし、それとともに「禁欲的手段」としての労働も成り立たなくなり、「自己目的」の傾向=演技性をますます強めていく。「体面 (Dehors) を守る」というのがトーマスの信条であり口癖だったが、いまや彼は中味のない体面だけの存在である「役者」に成り果てる。「彼の内面は貧しく荒れはて、[...]」それがどんな犠牲を払ってでも威厳をもって人前に現れ、自分の衰えをあらゆる手を尽くして隠し、『体面』を守ろうとする妥協のない義務感、粘り強い決心と結びついて [...] 彼の生活を作為的で意識的な、無理のあるものに作り変えた結果、人前での一言一句、一挙一動は緊張を強い、神経をすり減らす演技と化した」(614f.)。この「役者としての演技」は彼の顔つきに如実に表れる。「口と頬の筋肉は普段は訓練され意のままになるよう強いられ、不断の意志の力に仕えていたが、「冷静さ、思慮深さ、愛想のよさ、力強さとして長いことひたすら不自然に保たれてきた表情」はまるで「仮面」(465f.) のようだった。こうしたトーマスの滑稽かつ悲惨な顔立ちと振舞いを傍でじっと見ていたのは息子のハンノである。「彼は父親が皆にふりまく自信に満ちた愛想のよさを見ただけでなく [...]」それが非常に無理をして作られたものであることも見ていた [...] 次の家の敷居をまたぐやその同じ顔に仮面がかかり、その同じ疲れ切った身体にいつも新たに突然柔軟さが躍動するのを心中驚愕しながら感じた…。父親が人前に出て、話し、振舞い、動き、為すことはハンノには無邪気で自然で半ば無意識の [...] 実際的な利害関心の主張ではなく [...] 一種の自己目的、意識的で作為的な努力に映った」(627)。ヴェーバーが指摘していた「自己目的としての労働」の観念に潜む「非合理性」がトーマスにおいては心身の病的な症状となって露わになっている。そして彼の強張った「仮面」と硬直した身振りは『プロ倫』の末尾に出てくる有名な「鋼鉄の甲殻 (stahlhartes Gehäuse)」の比喩を想起させる。「[...]」ただ『いつでも脱ぎ捨てることのできる羽衣』のように外物への配慮は聖徒の肩にかかっているべきものだった。しかし運命はこの羽衣から鋼鉄の甲殻を生じせしめた」(PE, 153)<sup>(26)</sup>とヴェーバーは言う。あの世での魂の救いこそが人生の大事であったピューリタンにとって、この世の諸々の外物への配慮は「救いの確証」として本来二次的な意義しか認められてはならなかったのだが、それが心理的に大きな影響を及ぼすうちに転倒し、今日ではもはや着脱自由な「羽衣」ではなく、自己拘束的な「鋼鉄の甲殻」として資本主義の精神の硬化を帰結した。この運命的プロセスが『ブッデンブローク』ではトーマスの心身に沿って具体的にたどられていた。自己の内面の崩壊を隠そうと、ひたすら「体面」を守ること——これが彼にとっての「外物への配慮」である——に必死なトーマスは「仮面」をつけ「役者」となって「演技」をすることで「鋼鉄のピューリタン商人」を装うが、それは「鋼鉄の甲殻」を纏うことでしかなく、ついに彼は自家中毒のように資本主義の精神の硬化症に倒れてしまう。

以上、『プロ倫』の論旨に即して『ブッデンブローク』を読み解いてきたが、二作品の適合性に関するマンの多分に直観的な言及は精査によく耐えうるものであったと言えよう。その適合性の具体的な理由としては、基本的視角の共有（宗教教義の日常レベルでの影響や資本主義の精神性への注目）、宗派的基盤の偏差を含みながらの重複（ルター派にとどまらず、禁欲主義的傾向をもった敬虔派、さらに心理的モチーフとしてのカルヴァン派）、国民経済学の知見（リューベックでの経験をふまえたミュンヘンでのモダンな学問の刺激）などを指摘した。最後の資本主義精神の

硬化の面での適合——『プロ倫』末尾の予言的な一節と『ブッデンブローク』の没落の描写——は「ごく一般的に『時代精神』と呼ばれるものへの〔両者の〕内観と感情移入」<sup>(27)</sup>によるのだろうが、この「時代精神」を具体的に探るならおそらくニーチェの影響があるように思われる。しかしこれはそれ自体大きなテーマゆえ示唆のみにとどめ、稿をあらためて論じたい。

\* 本稿は日本独文学会2010年秋季研究発表会（千葉大学）でのポスター発表にもとづく。

(1) この論文はもともと1904年と05年刊行の『社会科学・社会政策論叢』に掲載されたが、現在広く読まれているのは後に『宗教社会学論集』に収められた1920年の改訂版である。本稿では厳密を期して原論文を参照するが、その際改訂版との異同を注記した次の文献を用いる。

Max Weber: Die protestantische Ethik und der "Geist" des Kapitalismus. Klaus Lichtblau/Johannes Weiß (Hrsg.) 3.Aufl. Weinheim 2000. (PE と略記、頁数を記載)

原論文の邦訳には、マックス・ウェーバー（梶山力 訳、安藤英治 編）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」』（未来社 1994）という労作がある。

(2) トーマス・マンの著作からの引用は次の全集に拠る。

Thomas Mann: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Frankfurt a.M. 1974/1990. (GW と略記、ローマ数字で巻数、アラビア数字で頁数を記載)『ブッデンブローク』はこれの第I巻に当たるが、誤解のない限り頁数のみ記す。また適宜、現在刊行中の注釈つき全集も参照する。

Thomas Mann: Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Werke – Briefe – Tagebücher. Frankfurt a.M. 2002ff. (GKFA と略記、巻数と頁数を記載)

(3) マンがここで参照し、ヴェーバーやトレルチに関する記述を密かに引用しているのは哲学者エミール・ハマーヒャー（1885-1916）の『近代文化の主要問題』（1914）という著書である。Vgl. Hermann Kurzke: Thomas Mann. Epoche – Werk – Wirkung. 3.Aufl. München 1997, S.49; GKFA 13.2, 264f.

(4) 早くはヴェーバー、マン双方と親交のあったゲオルク・ルカーチがこの点を示唆している。Vgl. Georg Lukács: Auf der Suche nach dem Bürger. (1945) In: G.L.: Thomas Mann. Berlin 1957, S.21f.

『プロ倫』と『ブッデンブローク』の相関を中心にヴェーバーとマンを取り上げた本格的な論考としては以下のものがある。

Wolf Lepenies: Motive Max Webers im Werk von Thomas Mann. In: W.L.: Drei Kulturen. Soziologie zwischen Literatur und Wissenschaft. München/Wien 1985, S.357-375.

Harvey Goldman: Max Weber and Thomas Mann. Calling and the Shaping of the Self. Berkeley/Los Angeles/London 1988.

Edith Weiller: Gesichter der Askese. Max Weber und Thomas Mann. In: E.W.: Max Weber und die literarische Moderne. Ambivalente Begegnungen zweier Kulturen. Stuttgart/Weimar 1994, S.257-298.

Andreas Urs Sommer: Der Bankrott 'protestantischer Ethik'. Thomas Manns *Buddenbrooks*. Prolegomena einer religionsphilosophischen Romaninterpretation. In: Wirkendes Wort 44 (1994), S.88-110.

Manfred Dierks: *Buddenbrooks* und die kapitalistische Moderne. In: Thomas Sprecher (Hrsg.): "Was war das Leben? Man wusste es nicht!" Thomas Mann und die Wissenschaft vom Menschen. Frankfurt a.M. 2008 (Thomas-Mann-Studien Bd.39), S.111-126.

(5) ヴェーバーは「ドイツはさしあたりまうたく論外としておく、というのはそこではカルヴィニズムはどこも広域を支配したことがないからである」(PE, 58, Anm.69) と断っている。

- (6) Vgl. Ada Kadelbach: Was ist das? Ein neuer Blick auf einen berühmten Romananfang und die Lübecker Katechismen. In: Manfred Eickhölter / Hans Wißkirchen (Hrsg.): »Buddenbrooks«. Neue Blicke in ein altes Buch. Lübeck 2000, S.36-47. この教理問答書の正式のタイトルは、「Erklärung des kleinen Katechismus Luthers mit Eines Hochedlen und Hochweisen Rathes Genehmigung zum öffentlichen Gebrauche herausgegeben von Einem Ehrwürdigen Ministerio der freien Stadt Lübeck.」という。
- (7) このことは原論文でもはっきり言われていたが (vgl. PE, 55, 133)、ヴェーバーはこの点の誤解をなくすため改訂に際しトレルチの類書に関して「著者 [トレルチ] にとってはそこでは宗教の教義がより重要なのに対し、私にはその実際的な影響こそがより大事なのである」(Max Weber: Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I. 9.Aufl. Tübingen 1988, S.18) とあらためて強調している。
- (8) 1897年時点の手稿にはもっとはっきりと「フランス系移民の家族」とあった (vgl. GKFA 1.2, 501)。
- (9) 小説では商会を興したジャンの祖父が「ヴィッテンベルクで印刷された古い聖書」(58) を持っていたとされる。この聖書の図版は、Eickhölter / Wißkirchen (Hrsg.): a.a.O., S.51.
- (10) ヨアヒム・S・マンによる記録は GKFA 1.2, 571ff. に採録されている。例に挙げたジャンの文章の出典となった箇所は ebd., 575.
- (11) ただし (実在した) ヨアヒム・ジークムント・マンと (虚構の) ジャン・ブッデンブロークとでは生きた時代も場所も異なる。敬虔主義の盛期は17世紀後半からヨアヒム・S・マンが生きた18世紀にかけてであり、ジャンの属する19世紀とは時代がずれている。Vgl. Kurzke: a.a.O., S.71f. しかしルター派教会の力が強かったリュエックには敬虔主義はようやく19世紀になって入ったため、ジャンの歴史的な位置づけはそれほどおかしくはない。Vgl. Sommer: a.a.O., S.91. ちなみにヴェーバーも「19世紀最初の30年間におけるドイツでの敬虔主義の復活」(PE, 109, Anm.199) に触れている。「啓蒙主義への反動としての敬虔主義」という一般的な見解はこの19世紀の敬虔主義の方に当てはまる。敬虔主義の広がりについては、ヴェーバーも参照を促している (vgl. PE, 90, Anm.146) グスタフ・フライタクの著書『ドイツの過去の絵姿』によれば、シュペーナーがフランクフルトで司牧を始めて以来、敬虔な心情の持ち主たちの魂の交流がドイツ中で展開し、またシュペーナーがベルリンに移ってからはフランクのいるハレが中心になり、そこから今度は近隣諸国へも伝播していった。Vgl. Gustav Freytag: Bilder aus der deutschen Vergangenheit. 2.Bd. Leipzig o.J., S.595f., 602f., 639f. この間にメクレンブルク辺の出であるマン家の先祖が敬虔主義の感化を受けたことは十分にありうる。ただしヨアヒム・S・マンが住んでいたロストックはヴィッテンベルクと並んで「[ルター派] 正統信仰の最後の砦」(ebd., S.640) だったという。
- (12) Vgl. Renate Tebbel: Die Religion und ihre Vertreter. In: Ken Moulden / Gero von Wilpert (Hrsg.): Buddenbrooks-Handbuch. Stuttgart 1988, S.279-292, hier S.281.
- (13) Vgl. Tebbel: a.a.O., S.284f.; Sommer: a.a.O., S.92f.; Dierks: a.a.O., S.116.
- (14) 『ブッデンブローク』の Beruf 理念の詳細な分析は、Goldman: a.a.O., S.61-85.
- (15) Vgl. Dierks: a.a.O., S.121.
- (16) この「敬虔な集い (der fromme Verein)」(279) は明らかにシュペーナーが始め、敬虔派の信者たちがよく催した collegia pietatis あるいは Konventikel と呼ばれる集いを模したものである (vgl. PE, 95, Anm.153)。
- (17) 『ブッデンブローク』では予定説は明らかにそれとわかる形には表現されていない。ブッデンブローク家の正面玄関に掲げられている金言、「Dominus providebit」「主、守り給わん」(44) は、動詞 provideo のもう一つの意味である「予見する (voraussehen)」を考え合わせると (vgl. Jochen Vogt: Thomas Mann. Buddenbrooks. München 1983, S.25)、いかにも予定説に当たりそうだが、provideo の名詞形 providentia は

通常「摂理 (Vorsehung)」と訳されることから、予定の教義よりもむしろルター派の摂理信仰に近いと思われる。また Dierks: aa.O., S.118f. によれば、トーマスとクリスチアンの兄弟に「神に選ばれし者」と「神に見捨てられた者」という予定説の名残が見えるという。

- (18) 『ブッデンブローク』の経済史的背景については、Vogt: aa.O., S.54ff. に詳しいが、そこでも明らかにされているように、『ブッデンブローク』では産業革命を経ての近代資本主義経済システムへの発展過程（重工業への転換、産業資本や金融資本の発達など）がほとんど描かれていない。しかしこのことは後で見るように必ずしも資本主義の「精神」の不在を意味しない。ヴェーバーによれば、資本主義的な経済形態と精神とは互いに「『法則的な』依存関係」(PE, 24) にはなく、例えばベンジャミン・フランクリンが生きたマサチューセッツやペンシルヴァニアでは資本主義の精神が資本主義経済の発展に先行していた (vgl. PE, 17, 31)。
- (19) ヴェーバーの父方の祖父の家系はヴェストファーレンでリンネル産業に従事しており、『プロ倫』の原論文はそこからの見聞をソースに生かしている (vgl. PE, 22)。こうした成立史的事情も『ブッデンブローク』と似た面があり、マンも父方の親戚にリュエバックの地誌に関する情報を提供してもらっている (vgl. GW XI, 380; GKFA 1.2, 19f.)。
- (20) この言葉はトーマス・マンの祖父ヨハン・ジークムント・マン 2 世 (1797-1863) が小説同様にスコットランドへの商用旅行の折に父親（作家の曾祖父ヨハン・ジークムント・マン 1 世）の警句として家族の記録に書き留めている (vgl. GKFA 1.2, 617)。
- (21) この間いとルカーチ以来繰り返されてきた、トーマス・ブッデンブロークを Bürger、ヘルマン・ハーゲンシュトレームを Bourgeois として対置すること (vgl. Lukács: aa.O., S.17f.) は『ブッデンブローク』に即して見れば的外れと言わざるをえない。トーマスとヘルマンの相違は質的なものではなく、単に程度の差である。Vgl. Vogt: aa.O., S.71ff.
- (22) ただし父ハインリヒは実際はかなりモダンな企業家で、穀物商の他に銀行や保険業への投資も進んで行っていたらしい。Vgl. Manfred Eickhölter: Senator Mann und Thomas Buddenbrook als Lübecker Kaufleute. Historische Quellen und literarische Gestaltung. In: Eickhölter/Wißkirchen (Hrsg.): aa.O., S.74-99. しかし息子のトーマスの目には父のこういう側面はあまり見えていない。
- (23) Vgl. Thomas Mann: Collegheft 1894-1895. Yvonne Schmidlin/Thomas Sprecher (Hrsg.) Frankfurt a.M. 2001 (Thomas-Mann-Studien Bd.24), S.13.
- (24) Ebd., S.78.
- (25) しかも『ブッデンブローク』の構想はマンがこの工科大学の聴講生だった1895年の春には早くも萌していることが書簡からわかる (vgl. GKFA 21, 58)。
- (26) 通常この語は「鉄の檻」と訳されるが、ここでは Gehäuse の原意を汲んで「甲殻」と訳した。この一節に即せば、薄い衣が硬い殻にそれ自体変わることがポイントであって、どこか外から檻をはめるというイメージではないことに注意したい。「鉄の檻」という訳語にまつわる問題は、荒川敏彦「殻の中に住むものは誰か——『鉄の檻』的ヴェーバー像からの解放」、『現代思想11月臨時増刊』35-15 (2007)、78-97頁、特に80-83頁参照。
- (27) Dierks: aa.O., S.120.

[学外研究者による査読を含む審査を経て、2011年9月13日掲載決定]

(一橋大学大学教育研究開発センター非常勤講師)